

I. 導入

おはようございます。クリスマスグッズが店に並び、クリスマスソングがあちこちで聞かれる季節になりました。ケーキやイルミネーション、クリスマスソングを楽しんで祝うのはよいことですが、クリスマスの意味について少し立ち止まって考え、クリスマスを祝うのがなぜそれほど喜ばしいのかを思い起こしたいものです。



クリスマスは、イエスのご降誕を祝うときです。もっと言うと、クリスマスは愛を祝うお祝いです。というのも、イエスの物語は愛についてだからです。男女の愛や親子の愛ではありません。それらは素晴らしいものですが、クリスマスに祝われる愛の模倣に過ぎません。クリスマスに祝う愛は、人間の愛をはるかに超えた創造主なる神の愛です。神はそのような愛で、ご自身の被造物である人間を愛してくださっています。神の愛は、100%純粋で、徹底的に尽くす愛です。使徒ヨハネは、自身の第一の手紙でこの愛について語っています。では、ヨハネ第一 4:7-16 をともに読みましょう。

II. 聖書朗読 ヨハネ第一 4:7-16 (新共同訳)

4:7 愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。4:8 愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。
4:9 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。4:10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。4:11 愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。4:12 いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。4:13 神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまることが分かります。4:14 わたしたちはまた、御父が御子を世の救い主として遣わされたことを見、またそのことを証しています。4:15 イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、神がその人の内にとどまってくださり、その人も神の内にとどまります。4:16 わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。

III. 教え

ヨハネは、互いに愛しなさいと勧めています。そして、愛することについての完全な模範として、神の愛を指し示しています。ヨハネは「神は愛だ」と言います。それは、神の本質が愛であるという意味です。神の愛は、神が世界をお創りになった後で付け足されたおまけではありません。むしろ、愛こそが神に天地を造らせしめた原動力なのです。愛という動機のもとに、神はご自身のことばの力によって天地を創造されました。神がお語りになり、天も地も存在するようになったのです。



過去 50 年で、人類は宇宙探査に乗り出し、神が創られた宇宙の姿を見られる機会が増えました。科学の飛躍的な進歩により、人は宇宙への第一歩を踏み出したのです。私が子どものころ、宇宙から撮影された

地球の写真などはありませんでした。しかし今では、小さな子どもでも美しい地球の写真を見たことがあります。人間の知識は急発展しました。もちろん、現代の科学的理論の中で将来には間違いとされるものもあるでしょう。それは科学の性質です。そうであっても、私たちの住む宇宙について、現代人は昔の人より格段に多くを知っていることは確かでしょう。



人類の知識はどんどん増えています。そして、すべてのものが神によって、神のみことばの力によって創られたことを知るなら、神の力と知恵に対する感銘もどんどん増すはずで、神は私たちの住む小さな惑星だけでなく、銀河のすべて、そして時空のすべてを創造なさったお方です。

人類の知識はどんどん増えています。しかし、研究や探究の中で、私たち人間は愛について何か新しいことを学んだでしょうか。率直に言えば、もう長いこと愛について新しい発見はないと思います。実際、愛について知っているわずかなことさえ忘れる危険性すら感じています。少し考えてみてください。広大に広がる宇宙、そしてすべての生物の細胞に見られる精密さ、それらは皆、神の力と知恵を物語っています。しかし、聖書は「神は力と知恵だ」とは語りません。聖書は「神は愛だ」と語ります。神の愛は、時空の広がりよりも高く、広く、深いのです。それは、神が被造物より偉大なお方だからです。神の愛は海よりも深く、空よりも高く、銀河よりも大きく、時間そのものよりも長く存在するものです。



神のご性質、その本質が愛です。神がご自身の愛をお示しになる方法は時と場合によって違っても、神のご性質は変わりません。神のご性質は永遠に変わらぬ完全な愛です。この愛が、被造物に現れています。しかし、使徒ヨハネは、空の星や野の花を指して、神の愛について書き記してはいません。そうではなく、歴史上のできごとを指し示しました。ヨハネは語ります。(ヨハネ第一 4:9-10)「**4:9 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。4:10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。**」

私たちは自分の罪によって神から引き離されています。しかし、神は私たちをお見捨てになりませんでした。神は、私たちを罪から救うために、ご自身の御子イエスを送ってくださいました。宇宙を創造するのに神が払った犠牲は何でしょう。私たちの知る限り、そこには犠牲はありませんでした。神はただことばを発せられ、宇宙が創られたのです。では、私たちを救うために神が払われた犠牲は何でしょう。それは、神のひとり子です。真の愛はささげる愛です。神は愛です。ヨハネ 3:16 はこう語ります。「**神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。**」神はご自身の御子を与えてくださいました。その御子イエスは、私たちの身代わりとなってご自身の命をささげてくださいました。これこそ、ヨハネが指し示す愛の姿です。神がイエスを送られ、イエスがご自身を私たちの罪のための贖いのいけにえとしてささげられた事実です。



イエスが一人で死ななかったことには深い意味があると思います。二人の男が、一人は右にもう一人は左にイエスと一緒に十字架にかけられました。彼らは犯罪者でしたが、イエスは罪のない神の小羊でした。にもかかわらず、この三人が一緒に死ぬことを神はよしとされたのです。ここでわかるのは、イエスの死が、人間の苦しみとは無関係の孤高の死ではなかったことです。ふたりの男たちと並んで死なれたイエスの死は、血生臭く残酷で、痛みと苦しみに満ちたものでした。私たちは罪人で、私たちの救い主は罪のない完全なお方です。私たちとは異質のお方です。しかし主は、人間と生死をともにすることを選んでくださいました。ふたりの男のうち一人は、イエスを信じて救われました。もう一人は最後までイエスをあざけりました。三人はそれぞれの十字架にかかって、並んで死にました。救い主なるイエス、赦された信徒、そして頑なに信じることを拒む人。私たちの救い主は、遠く離れて上から見下ろしているお方ではありません。人の苦悩とは無縁のお方でもありません。私たちのすぐそばにいてくださいます。信徒と苦しみをともにしてください

ます。また、信じていない人たちとも苦しみをともにしていただきます。

イエスがお生まれになる 700 年前、預言者イザヤは、苦しむメシアであるイエスの来臨を予見し、これらの言葉を書き記しました。**イザヤ書 53:3**「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。」私たちの救い主イエスは、多くの痛みを負い、病を知っておられます。あなたが今どのようなことを経験していても、どれほど痛み、悲しみ、苦しんでいても、このことだけは知っておいてほしいのです。イエスはすべてをわかっていただきます。そして、あなたと苦しみをともにしていただきます。イエスはあなたのそばで、ともに涙を流していただきます。



神が全能で愛のお方なら、なぜ世の中にあふれる苦悩をそのままにしておかれるのかといふかる人がたくさんいます。その問いに完全に答えることができるのは、おそらく神ご自身のみでしょう。けれども、その答えの一部は、神が私たちの苦しみを遠くから眺めているお方ではないという事実にあるのではないのでしょうか。神は私たちと苦しみをともにしていただきます。イエスが私たちと苦しみをともにして下さることで、それがわかります。イエスは肉を宿した神だからです。

ヨハネが私たちに見せたかった愛の姿は、イエスが神であるという理解によって完成されます。これは、聖書にはっきりと書かれています。たとえば、**フィリピ 2:6-8** はイエスについてこう語ります。「**2:6** キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、**2:7** かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、**2:8** へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」

イエスは本質的には神です。しかし、神の御座を離れ、へりくだって赤ん坊となってこの世に来てくださいました。ご自身を無とされたのです。イエスは、人間の姿で来てくださり、人として生き、人生の辛苦を味わい、ついには私たちに命を与えるために身代わりとなって死んでくださいました。こうして、イエスは神の愛を私たちに現してくださったのです。夜空に広がる銀河や野の可憐な花々は、神の力と栄光を告げ知らせます。その美しさをもって、神の愛をもささやきます。しかし、イエスの十字架は違います。十字架では、神の力と栄光は隠されて、神の愛が告げ知らされています。神は愛です。イエスの十字架を見て、そのことを知ってください。私たちの神は、人生の苦悩を常に取り去ってくださるわけではありませんが、どのような苦しみでも、私たちとともに苦しんでくださいます。



私たちは人間ですから、つまらないことを言ってしまうことがあります。神さまみたいに何でも知りたいなどという言葉聞いたことがあります。神さまになりたいと言う人もいます。こんな言葉は、あまりにも浅はかに思えます。その理由は、私が聖書を学んで確信しているところにあります。それは、神がすべてのことを観念的に知っておられるのではなく、実体験として知っておられるということです。愛の性質は、愛する人とともに苦しみを分かち合うことを意味します。そして、神は愛ですから、老若男女を愛してくださいます。そして、私たちとともに苦しみを分かち合ってください。

それは、どういうことでしょうか。つまり、キリストの十字架は、神が私たちのために苦しまれるという点では氷山の一角に過ぎないということです。神の苦しみの大部分は、私たちの目の届かないところに隠れています。冰山も大部分が水面下に隠れているのと同じです。神はすべての痛みを感じてくださると私は信じています。ガンの痛みや銃弾による傷、心に受けた傷、ひざのかすり傷、この世のすべての痛みです。戦争や病気、暴行や殺人、飢餓など、この世のすべての苦しみを、神も感じておられると信じます。皆さんが感じる痛み、私が感じる痛み、そのすべてを神が感じてくださると思います。愛に満ちた神がなぜ世の中の苦悩をお許しになるのかという問いに対する完全な答えとは言えませんが、神が私たちを深く愛してくださり、苦しみをともにして下さると知れば、新しい観点で物事を見られるのではないのでしょうか。子どもがこけて膝をすりむくと、



子を愛する母親は自分のことのようにその痛みを感じます。同じように、神も私たちの痛みや苦しみのすべてを敢えて感じてくださるのです。それは、神が私たちを愛しておられるからです。

IV. 結び

2000年前、天使ガブリエルがマリアという若い女性の前に現れました。マリアは恐れたとルカは語ります。しかし、**ルカ 1:30-31**には、天使が彼女にこう告げたと書かれています。「**1:30**すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。**1:31**あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。」マリアは、男性を知らない自分にどうしてそんなことが起こるのか、と尋ねました。するとガブリエルは、聖霊を通して神の力に包まれてそうなることを説明しました。このことが起こって数ヵ月後、イエスがお生まれになりました。イエスは主であり救い主です。このお方はインマヌエル、つまり「神がともにおられる」というお方です。



神はそのとき聖霊をとおしてマリアとともにおられました。神は今日、私たちとともにおられます。神はなぜマリアのところにいられたのでしょうか。なぜ私たちのところ、そしてすべての人々のところに来て、神との交わりに招かれるのでしょうか。それは愛によるのです。愛が神を私たちのもとへ何度も何度も来させるのです。愛があるからこそ、神はすべての人を神の恵みと罪の赦し、そして永遠の命へと招いてくださいます。クリスマスの準備として私たちができる最高のことは、心に神を喜んで迎え入れることです。それは、イエスとその御名、すなわちインマヌエル「神がともにおられる」を信じることによってできます。

今日は最後に、**テモテ第二 1:9-10.9**をお読みしましょう。「**1:9** 神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、わたしたちの行いによるのではなく、御自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、永遠の昔にキリスト・イエスにおいてわたしたちのために与えられ、**1:10** 今や、わたしたちの救い主キリスト・イエスの出現によって明らかにされたものです。キリストは死を滅ぼし、福音を通して不滅の命を現してくださいました。」

V. 祈り